

九十年の展望と若い世代への期待

—お茶の水女子大学創立九十周年記念講演—



蠟 山 政 道

昭和四十一年は、お茶の水女子大学の前身東京女子師範学校に、日本で始めて幼稚園が創設せられてより九十年の年である。それに先立つこと一年前に、東京女子師範学校が設立され、昨年その九十周年の記念式典が行なわれた。本論は、その際に、記念講演として、元学長蠟山政道氏のなされたものである。幼稚園の九十年の歴史と今後の課題を考える際にも、この講演は大いに参考となると思うので、幼稚園創設九十年の年に当り、これを掲載することとした。

お茶の水女子大学の創立九十周年に当って、私はこの九十年の日本の歴史を顧み、また将来を展望して、いささか感じたことを述べたいと思います。

明治の栄光と教訓

明治の栄光

九十周年に当って、私がまず感じましたことは、九十年という長い年月のことです。そしてその初期であった、明治七、八年のころのことです。私の父は明治五年に生まれましたので、よく自分の子どものころや若いころのことを私にきかしてくれましたのでありますが、その中に、多分明治八年ころに作られたという—今日のことばで言えば民謡であります—うーこういう歌がありました。

文明のこの世にあらわれ、西に大関イギリスならば、東に名

にし負う日の本と、言われてみたいが精一杯

何と皆さま、篤心あつて勉強しようじゃありませんか

とこういう歌があつたというのであります。この歌の中にもあらわれていますように、当時の明治初年の頃の日本人の気持ちの一端がよくあらわれていると思います。一生けんめいに、文明国の域に到達しようと努力した姿がよく見えています。

近代国家の礎石の一つである教育制度も、そうした大勢の中から、そのような国民的気持ちの中から築かれたものと考えられるのであります。すなわち、明治五年の学制頒布「邑に不学の家なからしめる」という教育普及の精神が、やがて師範学校制度を生み、その方針のもとに本学も誕生したと言つてよいのではないかと思ひます。しかし、そういう教育制度を重要な礎石とする近代国家の形成発展の途上には、実に幾多の問題が横たわつております。そこには、変化ということばが最も適当と思はれるような状況の変転があります。

私の好きな政治家の一人に、勝麟太郎という人があります。彼が隠退して、随想を書いて発表しているものが今日残つていますが、その中でこういうことを言っています。「天下の形勢、七年にして一変す」と。漢文口調で聊か大仰であります。明治初年において、七、八年ごとに大きな形勢の変化があります。すなわち、この学校が誕生したころは、第一の段階をすぎている。

幕末維新の大変動、今日のことばで言えばクーデター、あるいは内乱を経て、王政復古、廢藩置縣を完成し、明治政府は土台を築き上げました。その結果が明治八年の大阪會議でありました。それはやがて西南の役に一つのエピソードを残しますが、しかし大勢としては明治政府の根幹が築かれました。

次の段階は実に重要でありますから、今日もよく知つておかなばなりません。明治政府は、一口に藩閥官僚の政府、軍人の政府であつて、そこには国民の参加がありません。国民はどういう役割を明治政府において果たしたか、また果すべきかという問題があります。これが政党の問題であります。藩閥や官僚に政府を任せておけないという一派があり、また当然あつて然るべきであります。それが明治八年ころから、いわゆる愛國公党の名において今日の政党政治の第一歩をふみだしたのであります。その政党と官僚との争いをどこで妥協せしめるか、どこに進むべき新しい明治日本の路線があるか、という問題こそ、その第二の段階で論ぜられ争われたのであります。その結末が明治十四年の、いわゆる国会開設の詔であつて明治二十一年を以つて憲法を公布し国会を開設という詔勅がでて一応けりがつきました。それから憲法の制定と国会開設の準備にかかります。そして、第三段階すなわち明治二十一年、二年において、憲政時代にはいり、明治政府は一つの時代を画することになりま

す。それから二十五年間はいわゆる明治の栄光の時代となったのであります。その間、内に産業の基盤を作り、外に対外的活動の準備にのりだし、日清、日露の兩戦役に勝利をえました。しかし、明治の栄光の時代は、近代国家としての日本の歩みだした一つの特徴を示すに止まるのであります。明治の時代が、明治天皇の崩御によって終りを告げたとき、日本の近代化過程には、また大きな問題が発展しようとしておりました。

明治の終焉

明治天皇の崩御のとき、たまたま私は田舎の中学校を卒業しようとするころでありました。たまたま新聞をよむと、ロンドン・タイムスの記者がこういうことを書いておりました。

—日本は今まで明治天皇という優れたリーダーシップのもとに、正直な、愛国心をもった政治家に補佐されて、輝かしい時代をもった。明治時代は日本の上り坂であった。しかし、今や明治天皇の死によって、日本の優れたリーダーは失われた。これからの日本はおそらく混乱であろう。そしてへたをするところである。—それをよんで、私もは、いったい、国家が上り坂とか下り坂とかはどんなことなのか、これをどういう風に解釈すべきであるのか、歴史や地理を少し習っていましたが、よく分らない。そこで中学の先生にきくと、どうもそういうこと

はむずかしい、いまし勉強しろと言われて、大した回答も与えられなかったことを記憶しています。今やそのロンドンタイムスの記者の予言をした如く、日本は明治時代を過ぎて、その次の大正・昭和の時代にいろいろの変化をつぶさに経験したのであります。明治以後五十年、我々は明治時代とは違った大きな経験をいたしました。そして、今また我々は新しい一つの局面に到達したと言つてよいと思います。

歴史の教訓

こういう時代の変化、あるいは歴史の変化をどう見るべきでありますか。これをどう受けとめるべきかは、歴史家トインビーの言うように、我々にとって大きな挑戦であり、課題であります。

私は物心がついて、日本の歴史というものに多少の関心を持ち始めて以来、五十年あります、この五十年間に我々の経験したことは、やはりロンドンタイムスの記者が予言したように、変化に対する日本人の対応のしかたが大きな混乱と失敗を重ねたことでもあります。このことを、どのように我々は歴史の教訓としてうけとめるべきか、まさに今日、今後の日本人の大きな課題であります。それはどういうことかと言うと、明治時代は、ひと口に言えば、近代国家の一つの礎石では

あるが、必ずしも、重要な礎石ではない。これは一つの偏ったナショナルリズムであります。民族の統一という近代国家の重要な礎石ではあるけれども、ただ一つの側面に過ぎません。

もちろん、今日、眼を少しく広く遠く放つて見るなら、現在のアジアの諸国は、二十世紀の半途をすぎた今日においても、我々の先輩たち、父母たちが努力した明治時代の形成ほどに成功を上げていない国が多くあります。去る九月三十日、インドネシアには大きな共産党及び一部空軍によるクーデターが起こりました。このクーデターに反対した軍部の指導者の一人、ナスチオン陸相のことを新聞でみますと、クーデターのために倒れた六人の將軍の棺を前にしてこういう演説をしています。

「この六人の將軍たちは、真に我々の英雄である。我々の進もうとする道を明らかにしてくれた人々である。インドネシアの進むべき道、インドネシアにおける真理は我々の手にあるということがこの將軍たちによって示されたのである」ことはを換えて言うならば、「軍部が中心になってインドネシアの政体を形成するべきである」というのであります。

果して、インドネシアの統一は、この軍部の意図したクーデターの中に真理があるのでしょうか。現に、インドネシアに指導的デモクラシーというスローガンによって今まで勢力を握っ

ていた大統領スカルノは、それとは違った考えをもっておりません。彼は、軍部が代表しているようなナショナルリズムの外に、共産主義、回教徒の宗教勢力の三者が調和を計って統一を見出すとするナサコムというフィロソフィーを持っております。

軍部はこのナサコム哲学に反旗を翻しています。どちらに真理があるのか。まだいぜんとしてスカルノは生命を保っています。軍部の反クーデター必ずしも成功していません。共産党もかなり変転きわまりない術策をもって、いぜんとして勢力を失っていません。インドネシアという一つの国をとってみても、その国が立派な統一国家を形成して、明治時代の日本が、明治政府の下に歩んだような成功の道を進んでおりましようか。私はまだそこに多くの問題が未解決に残されていると思います。そういう東南アジアなどの今日の状況から判断するとき「明治の栄光」の時代を持ったということは、ともかくも我々にとって、恵みの時代としてよいと思います。

大正、昭和の日本の歩み

日本経済と国際関係

しかし、ひろく世界史に思いをはせるとき、明治の時代が過ぎて、大正、昭和の時代になって我々が辿った道は、必ずしも

誇るべきものではありません。そこには近代国家としての第二の重要な条件である産業化、すなわち企業の発展、資本主義の発展に伴ういろいろの問題があります。現に、大正の時代が始まるや否や、我々の経験したのは、日本の産業構造が大きく変動しつつあることであります。それは農村問題であります。農村人口が六十五パーセントを占めているような当時において、農村の位置は日本にとって重要であります。

まだまだ人口の大半は農村にすがっていた、この農村の重要な生産である米作に大きな変動が生じました。それは米価の下落であります。私は田舎におり、商人の倅として生まれましたので、農村の好況不況はいちいちよくわかるような気がいたします。今まで元気で買物にきてくれた百姓もあまり元気がない。母親にそれをききますと、やはり米作が不振であり、米価が下落したために、農民たちは元気がないのだ、ということであります。都市が農村に依存している当時の日本の状況では、いま不景気なのはやむを得なかったのであります。私はまだ経済はよくわからないけれども、その頃の日本の姿を見ましたとき、農業が主体で、それに商業が依存しており、都市が独立の存在でないのは、工業が発達していないからだと思いました。そして、日本は農村への依存から脱却して工業国になるにはどういう道を辿らねばならないか、この問題こそ我々にとって大きな

問題ではないかと感じたのであります。

農村の人は、不景気であれば同情されます。しかし、たまたま二、三年にして欧州大戦が始まると、日本の経済は急に膨張し、そうすると米価は次第に上昇し、物価は騰貴いたしました。そうすると農村の人たちも投機をはじめ、ぜいたくになったということが新聞にでます。一体、こんなに簡単に経済変動に対処して、その場その場で世間が動いていいものでありましょうか。大正の時代に不況から好況に転じたのは一に対外的状況の変化によるものであります。すなわち、欧州戦争が勃発して、アジアの国を支配していた、英国、フランス、ドイツ、米国が手を引かざるを得ない。それらの国々は、欧州戦争に集中しなければならぬので、その結果としても一時的にアジアの勢力均衡が崩れたのです。その間隙に日本が進出しただけのことではないか、日本の経済発展において、アジアの市場とはどういうものかという疑問を持たざるを得なかったのであります。

さらにまた、戦争が終つたらどうなるのか。再び、いわゆる帝国主義といわれている国々が帰ってきたら日本はどうなるのか。明治の時代は日本は幸でありました。国際関係は比較的平穏でありました。ところが今や日本は欧州戦争で鬼の留守の洗濯のようなことをやって発展したが、この変転する国際状況に対処する用意があるのか、こういう問題を我々は頭に浮べなが

ら、その回答が得られぬことに苦しんだのであります。

シベリア出兵と滿州事変

たまたま、大正八年、シベリア出兵がありました。そのとき、文部省が学生をシベリアに旅行させるといふことで、良い機会と思ひ、私は大学生でありましたが、シベリア旅行に恵まれたのであります。

しかし、北滿州の一角に立つて、遙かにウラルの彼方を見ると、そこには新しい政治勢力としてのボルシェヴィズム、すなわち共産主義革命が成功して、やがてウラルの山を越えてシベリアのステップを踏んで太平洋にくるであろう。南の方、中国には、ちょうど今年百年を迎えた孫文の三民主義による民族革命の運動が起こっている。南から吹く風はやがて滿州にも吹いてくるのであります。こういう新しい勢力に加えて、さらに第一次世界大戦に参加して自信をもった米國は新しい極東政策を掲げて我々の前にあらわれております。西ヨーロッパの國々に加うるに、新しい産業國であり巨大な國家である米ソが加わるとき、アジアはどうなるか、日本はどういう役を演ずるべきかという問題を、シベリアを旅行し、北滿州をうろついている間に考えざるを得なかつたのであります。このことを偉い將軍たちにきいてもよくわかりません。外務省の役人にきいても、

何のためにシベリアに出兵したのかその真意がわからない。一体、日本人は何を考へて、こういう國際紛争場裡に突入したのか、疑問を持たざるを得なかつたのであります。

それ以來、この疑問を持ちつづけて、私は滿州に三度参りました。そして遂に、滿州事変というものが、避けることのできない日本政府の誤まれる政策であるとの結論に到達せざるを得なかつたのであります。

それは、一口にいつて、新しい國際關係における勢力の均衡における變動ということ、日本人は忘れていたのであります。それを忘れて、自分たちだけが一つの地歩を得ようとするとき誤りを犯すことは歴史が証明しております。現に、昭和四年、一九二九年、滿州事変が起こる二年前、われわれは京都で國際會議を開きました。そのときに、英國の歴史家のトインビーがきて、日本の代表、滿鉄總裁の松岡洋介と中国の代表とが論戦するのを見て、日本人は重要な運命的問題を扱っている、おそらく、下手をすれば日本はローマにおけるカルタゴの運命に陥るであろうと申しました。米國は近代的ローマ帝國である。ソ連もまた然りである。この二つの巨大な國家の間に介在して、日本はどういう役割を演じようとするのかを考へねばならない。この点を若い日本人は考へねばならないということ、彼は我々に教えてくれました。

カルタゴとローマの間にいくたびか戦われた戦争、ひとつはハンニバルがローマにまで攻めいったことを我々は思い出したのでありますが、日本の運命はいつたいそういうものなのだろうか。歴史というものをどういうふうに見たらよいかということに疑問をもったのであります。

それから十年、十五年の歴史は、本当に、カルタゴへの道を我々は歩んだわけでありませう。そして遂に「八月十五日」を迎えたのであります。

大正、昭和の当面した課題

一体、この昭和二十年八月十五日という日を迎えるまで、明治の時代が去って、大正昭和の時期を終えたとき、この間に繰り返した日本の根本問題は何でありませうか。一つは産業の発展がまだ中途半端でいい加減であるということでありませう。

日本人の生活がどういふあり方をしたらいいのかが、まだ変動のさ中であつて、政治家も国民も行政官もよくわからない。また対外関係、国際関係は変るものであります。諸国家間の力の関係は変る、そのさ中であつて、我々はどんな地位と役割を演じたいかにも未経験であります。また、その間に我々の経済がもし発展するとすれば、外国貿易を盛にせねばなりません。資源の乏しい国、技術はまだ十分でない国は、国際貿易によつて

外国の市場を獲得せねばならないと同時に、外国から技術を更に導入せねばなりません。こういう場合に国際経済関係をどうするかの。その一つの問題は、我々の経済的生命である貨幣価値、すなわち円価をいかに維持するかという問題であります。

ところが昭和四年の世界大恐慌にまきこまれ、我々は大不況に見舞われることになった。それというのも、さきほど述べた第一次大戦直後の大正九年のがた落ち、鬼の留守の洗濯にすぎない経済発展に、やがて鬼が帰ってきたら市場をあげ渡さねばならないのは当り前でありませう。そういう場合に、我々はどう対処するかに、大正十年以後の政党政治は当面したのであります。はじめて官僚や軍閥に代つて、日本国民の代表者としての政党というものが、日本国民の運命を決するような経済的不況という重大な問題にどう対処しなければならぬようになったのは、大正デモクラシーの進歩でもあります。しかしながら、デモクラシーは、一つの能力を必要とします。それは、問題の解決ということでありませう。その問題は、国家の発展状況によつて異ります。日本のデモクラシーのチャンピオンである政党がとりくまねばならなかつた問題は、明治の栄光の名残りの軍部が、最後のあがきといわんばかりに無謀にも大陸に向かつて、国民的支持もはつきりしないうちに派兵し、シベリア出兵からやがて満州事変を起こそうという計画をもつたということであ

りました。

いま一つの問題は、日本の経済の不安定でありました。日本の円価が変動きわまりない。日本の財政計画が、あるいは消極に、あるいは積極に、何が何だかちっともわからない。すなわち、国際関係における日本の経済的地位をどこにおくかという問題であります。こういう産業の発展を中心とする問題は、私どもは、国際状況との関連において、決して成功ではなかったと思います。

「八月十五日」の教訓と戦後二十年

これが大正および昭和初頭における私どもの経験でありました。ある人はこれを悲劇といっています。悲劇という意味を、我々は教訓として受けとらねばなりません。しかしこれが喜劇であつたらどうでしょう。日本人は、昭和四年の大恐慌、昭和六年の満州事変、昭和十二年の日華事変、昭和十六年の太平洋戦争、あのような段階にすぎると引きずられて行つた。一体これは悲劇だったのか、喜劇だったのかと十分考えてみる必要があると思います。しかし、これはまだまだ生々しい戦前の歴史であつて、まだ歴史家もこれに対する回答を十分に与えていません。我々は遂に八月十五日を迎えて、ほっとして一種の虚脱状態に陥ってしまいました。

それではどういふふうに、日本を建て直したらよいかを考えると、やはり過去の教訓を十分にかみしめていくことが必要であります。過去の教訓を忘れるものは、必ず亡ぶというサンタヤナのことばもあります。その教訓を十分にかみしめ、しかも新しい状況に適確な判断をくだす必要があります。

かくして、八月十五日以後、二十年を経過しました。この二十年の間に日本の迎つた道、経験した変化が、昨年ごろからいろいろ検討され、戦後二十年史が大へん問題になっているようであります。この問題にどういふ回答を与えるかは、今後の二十年にあると思います。これに対しては、もはや、私の如き年令の者かはや与り知り得ない世界であろうと思います。そこで私は、どうしても若い世代にこれを期待せざるを得ません。

状況判断というのは、我々の行動を予測しています。ドイツの哲学者ヤスバースはそういうことをいっています。行動のための状況判断なのだとすれば、今後二十年間にどういふ問題をかかえているかは、今日の状況から判断できると思います。その場合、当然、過去の教訓、明治の栄光の時代、それからすでに遠くなつた今日の時代をかみしめて、さまざまの教訓を得ると同時に、新しい時点に立って、問題解決に臨まねばならないと思います。

私はそこにおいて、次の二つの課題を若い世代に期待してい

ます。

若い世代の課題

環境の変化への対処——都市問題

第一は、私どもが何をするにしても、そこには大きな変化があつて、その変化は今や環境の変化としてあらわれているといふことであります。我々の生活をとりまいている物質的精神的状况が変化しつつあるという認識であります。すでに大正時代に多くの混乱と過誤を犯した農村問題はすでに大勢が決しています。なぜなら、人口の大半は、もはや農村にはいません。農村の人口は今や三〇パーセントを下っている。やがて二〇パーセントくらいになるだろう。そうすると、他の大半の人口はどこにいくのか。それは都市、とくに大都市におり、また集まるのであります。すなわち、そこに都市化という現象が起こつています。これに対する公共団体の対策は、ほとんど部分的であり、間に合わせであります。政府もこれに対する対策を十分に持っていないのが今日の状況なのであります。そこで、一体、環境というものをどう理解するのか、あらゆる科学がこの問題に対して、その分析と觀察に寄与せねばならない総合的な課題であると思ひます。

一体、我々の生活環境がこれほど急激に変わったということ誰が予期したでしょうか。我々の住まっている東京都を中心とする大都市圏——これをメトロポリスという——はすでに人口二千三百万をこえています。やがて十年、二十年にして四千万をこえるであります。四千万の人間が集中する一つの生活形態は、どういう形になるのか。この環境に対応する政策はどうして決定したらよいか。多くの人が言っているように、そこにはマーケット——取り引き——が行なわれ、市場という原則が働いています。物を売買するにしても、土地をかうにも、取り引きである、企業である、商売である、そういうマーケットセオリーが働いています。それのみでない、人間が毎日生活し行動するための物理的から、思想的、心理的な問題に至るまでの我々の生活構造というものがある。自動車に乗るか、歩いていくかは別として、人間は動かねばなりません。またそこでどういう生活を味わうかもいろいろの問題があります。多くの危険、困難もあり、またその激しさも、かつての状況とは全く違つております。こういう環境をどうして我々は支配するのかということについて、あらゆる科学、あらゆる専門家が集中的に研究してほしいと思ひます。また住民自身が考えていかねばなりません。そして行政官や政治家に教えて頂きたい。我々の住みよい社会、繁栄の社会をどうしてつくるのか、そこに起こる

危険や困難をいかにして除去できるかについて、あらゆる科学の専門家が人智を集中してほしい。そして住民とともに検討していかねばならない。これが第一の問題であります。すなわち、状況変化の挑戦に対応する応戦の仕方であります。

自主的な生活態度と社会倫理

第二の問題は、われわれ自身の生活態度であります。我々の心構え、個人の生活の仕方の問題であります。これについても、いろいろの学問が寄与せねばならない問題であります。しかし簡単にいって、我々の道徳倫理に、考え方の混乱があるように思います。これも学問の力に負う所の大きい問題ですが、個人の教養の問題としても考えていかねばなりません。

●楽観的態度

第一には、一筋の光を見出す態度であります。世の中の動き、あるいは他人との交渉、さまざまな人間関係に対し、私どもはどうしても多くの障害にぶつかりますが、そのために、世の中が暗くなり、多くの人の心の中には悲観的なものがあるように思います。これがあたかも現実的な観方であるものの如くに納得している人もいますが、一口に言って多くの人が悲観的に過ぎるようであります。そこには安易な楽観はありえません

が、しかし、私は何かして多くの困難の中にも一条の楽観を、あるいはウィジョンを把握してほしいと思います。すなわち、人間の、あるいは人間相互の問題として、一筋の光を見出したい。欲求不満、あるいは、いろいろの不平不満が重なる、人間はどうしても悲観的にならざるを得ません。また疎外されると反抗的になります。だがそこに一筋の光明でもあるならば、それを我々は見つかんで、安易な楽観主義ではないが、楽観的な態度をとってほしいということが新しい倫理でなければなりません。

●勇氣

第二は、我々は、いまし勇氣を必要とするということであります。今日の社会は大衆社会といわれています。大衆社会とは、大組織の社会であります。さらにまた新しい意味のビューロクラシーまたは組織の社会であります。そうなると、個人は勇氣を失う、ことなかれ主義、要領主義になるおそれがあります。その間にあつて、我々は自己の信条を生かし、人の信念に生きるために勇氣を持つ必要があります。勇敢な精神をもってほしい。これが第二であります。

●公平な精神

第三は、この複雑な大衆社会において、あるいは組織の中において、あるいは組織と組織、団体と団体との軋轢の間に立つて、その間の秩序調整をいかにして可能ならしめるかという問題であります。これは一に、公平という概念でなければなりません。一方に偏るといふことは公平を失うことになりません。

しかし、公平といふことは、そう世の中にあり得ることではありません。人間の間の対立や、相違や相克をこえて、公平であるといふことは容易なことではありません。私はそこに、人間が人間に対する愛、あるいは同情——場合によっては慈悲といふ——がなければ公平さは保てないと思います。たとえば、一つの法律を考えてみます。その法律とは、いかにも公平にできていますが、使い方により、圧迫の手段、統制の手段ともなりましょう。しかし、その法律によって、あるいは統制をうけるものもあり得るし、またそれが必要である故に法律ができるのであります。だとすれば、その統制をうける者がどのような立場にあるか、どのような気持ちでいるか、について、一片の同情がなければ公平さを失うでしょう。公平とは決してやさしいことではありません。

しかしいづれにしても、こうした楽観主義、勇敢であること、公平さを失わないという倫理的道德的態度を維持するならば、世の中が大きく変動し、困難な課題に当面しても、私は何

らかの新しい創造ができるのではないかと思います。戦争と平和とのパラドックスをいかにして解きほぐすことができるか、いかにしてギリシャ以来いわれてきた安全と福祉とを両立せしめることができるか、人生の根本問題に答える我々の道德的態度はそのへんにあるのではないかと思うのであります。

すなわち、学問的に政策的に、環境をつぶさに研究してほしい。それを正確に把握し、それを政策の上の実現していくといふこと、これをこれからのジェネレーションに期待したい。いまひとつは、個人として楽観と希望を失わない、勇敢であると同時に、同情をもった公平さを失わないという人間的態度をもって、これからの社会を形成して頂きたい。これが私が若き世代に期待するものの第二であります。

この二つのことを、私は九十年の長い歴史を顧みるに際して、また、私自身、七十年の歴史を経験している、その体験から申し述べたいと思つたのであります。この歴史が我々に挑戦し、自ら解決すべき課題を与えてくれたことに對し、その成功と失敗の両面をもった日本の過去でありますが、その教訓を汲みとると同時に、今日の世界の情勢を見ながら、とくに革命的状况にあるアジアにおいて、日本の正しい進路を確立していくためには、このような二つのことが、二つの努力が必要のよう

に感ずるのであります。